

帰国して3年ぐらい経ったとき、彼女の日本に対する見方が変わってきました。日本のものにもそれなりの良さがあることを認められるようになってきたのです。この時期から、日本語の力が急成長を遂げ、力を発揮するようになりました。

今は高校3年生ですが、英語で話すときは英語の顔に、日本語で話すときは日本語の顔になります。自分の中で二つの言葉をはっきり切り替えて使いこなしているようです。日本語にもだいぶ自信がつき、英語ではスピーチコンテストで優勝するなどの活躍も見せています。

Aさんの例からは、言葉は生活や文化と深く結びついているので、文化に対して心を開くことができなければ、言葉の力もなかなかついていけないことが分かります。アメリカに住んで英語を学ぶのであれば、まずアメリカの環境が好きになることです。新しい文化や言語を受け入れられるようになるまでには、時間がかかることもあります。それまでは、得意な言語での自信を保つ配慮をしながら、あたたかく見守ってあげることが大切だと思います。

◆第一言語がしっかりしていれば

Bさんは、インドネシアから中学1年に編入しました。日本に住む予定がなかったのも、それまで日本語は勉強していませんでした。啓明で初歩の日本語から学習を始め、よく努力して力は伸びていきましたが、普通の教室の授業にはなかなかついていけないので、国語だけでなく、数学・社会・理科等も「取り出し授業」で特別に指導しました。その間も、インドネシア語の本を読むことを欠かさず、できるだけインドネシア語を使うことを心がけていました。高校に進むころには、学習言語として日本語が使えるようになってきました。

おもしろいのは、国際学級で英語の得意な友だちと交わることが多かったのも、いつの間にか英語の力がついていていたことです。高校2年生の時には、校内のスピーチコンテストで学年代表になり、自分が置かれた環境を積極的に評価し、親に感謝する内容のすばらしいスピーチを聞かせてくれました。

Bさんの例で見逃してはならないことは、彼女が自分の第一言語であるインドネシア語をおろそかにしなかったことです。インドネシア語は、学校で必要な言語でも、日本の生活の中で使う言語でもありません。しかし、初めは、日本語では簡単なことしか理解したり表現したりできないわけですから、年齢相当の知的刺激を得るためにはインドネシア語がどうしても必要だったのです。結果的に、彼女は三つの言葉が使えるようになっています。



アメリカに住むようになった日本人生徒の場合を考えると、英語で学習できるようになるまでは、日本語で知識を得たりものを考えたりする環境を保っておかなければ、知的な成長が望めません。その意味でも、補習校の役割はたいへん大きなものがあります。

「アメリカに來たばかりだからしばらくは英語に集中して日本語は後回しでよい」と考えるならそれはたいへん危険だということがお分かりいただけると思います。また、現地校の先生が、「英語を早く上達させるために家庭でも英語を使ってください。」と言われたとしても、日本語を使うことをやめてはいけないということになります。「英語を使ってください」というのは、「日本語を使わないで」ということではないと理解していただければよいと思います。

(次回は、さらにほかの例をご紹介します、小学生と中学生のちがい等についてもお話したいと思います。)

啓明学園の国際学級の様子、英語スピーチコンテスト、日本語スピーチ「私のメッセージ」を収録したDVDをプレゼントいたします。ご希望の方は、Eメールで、sasa@keimei.ac.jp までご連絡ください。

啓明学園 初等学校・中学校・高等学校 国際教育センター

〒196-0002 東京都昭島市拝島町 5-11-15

TEL : 042-541-1003

HP : www.keimei.ac.jp E-mail : kokusai_info@keimei.ac.jp



このお話の中で、啓明学園の「取り出し授業」の実践と効果を知ることができます。

「取り出し授業」は、帰国後の日本語や教科の学習の遅れをキャッチアップさせるための指導方法の一つです。生徒一人ひとりの遅れの程度・レベルに応じた個別指導を専任の教員が行う「取り出し授業」を、システマチックに実践しているのは、啓明学園以外に見当たりません。

豊富な経験と観察に裏打ちされた「バイリンガルの育て方」の続編を楽しみにしています。佐々先生、よろしくお願いします。